

## 研究ノート『こゝろ』のいわゆる「御嬢さん策略家説」再考

伊佐山，潤子  
鹿児島女子短期大学助教授

<https://doi.org/10.15017/10385>

---

出版情報：文献探究. 28, pp.1-7, 1991-09-30. 文献探究の会  
バージョン：  
権利関係：



『こゝろ』のいわゆる「御嬢さん策路家説」再考

伊佐山潤子

発表以来八十年余りの間に相当数の研究論文が書かれているにもかかわらず、『こゝろ』は依然として問題の多い作品である。「先生」の「奥さん」すなわち「静」という女性について、その評価あるいは位置付けといったものはつきりしていないのも未解決の問題の一つである。

石原千秋氏が、「『策路家』（下十五）としてのお嬢さん（静）と奥さん（その母）」という見方はようやく定説になりつつある。」と述べられたのは一九八五年のことであったが（注一）、その後も反論が絶えず、今日にいたってもなお一向これが「定説」になった気配はうかがえない。

そもそも、石原氏が、「このような考え方（今かりに「策路家説」と読んでおく―筆者）をかなりはつきり打ち出しているもの」としてあげられた、

- I 松本洋二（注二）
  - II 寺田 健（注三）
  - III 秋山公男（注四）
  - IV 米田利昭（注五）
- 各氏の四論文、および、  
これに近いとされた

V 相原和邦（注六） 氏のもの、都合五つの論文のそれぞれが真に「策路家説」をとるものであった

のか、私見ではかなり疑問に思える。従って、石原氏が執筆された時点でこれが「定説になりつつある」状況であったのかどうか、立ち戻って今一度検討する必要があるのではないかと考えるものである。

以下まず各論文について内容を読み直してみる。

○ Iの松本論文の「奥さんは、『私』の気持を確かめようとしながら、『私』を巧みに自分の考えに誘い込もうとする」という部分を読めば、氏が「策路家説」をとるもののように見える。だが、松本氏の眼目はそこにはない。

「奥さんが、叔父と同じような意味で、つまり『私』の財産を狙っていて、そのために御嬢さんを『私』に近づけようとした、というのは『私』の妄想であつたらう。奥さんが、自分の娘の将来のために、しっかりした伴侶を求めるといふのは、親として当然考えるはずのことである。」と、氏ははつきり書いておられるのである。娘に好意を持っているのは明らかで、結婚したいとさえ思っている様子がうかがえるのに、ちっとも煮えきららない男に決心を促すためあれこれ手を尽くしてみるのは母親にしてみれば普通のことであつて、「もし、『私』がもう少しいわゆる処世術に長けていたならば、もっとスム

「スに御嬢さんとの話は進んでいたに違いない。しかし、実際には『私』は、奥さんを策略家ではないかと疑っていて動こうとしなかったのである。」とあるのを見れば、氏の考えが「策略家説」などでないことは言うまでもなからう。

また、「御嬢さん」の態度についても、氏はすべて「私」への好意から出たものとしておられる。「現代とは違って、男ですら相手の女性に好きだと直接言いくかつた時代である。御嬢さんが直接行動に出ることはなほおむずかしかつただろう。彼女としては、男の気をひいてみるよりほか仕方なかつたのである。」や、「御嬢さんとしては、待てども待てども心を開いて自分の気持ちを示そうとしない『私』にじれったさを覚え、いわばKをだしにして『私』へのあてこすりをやっているともいえるのである。」との記述から「策略家説」を導き出すのは難しい。好意を寄せている相手を「意識」して、何とかその人の気を引こうとするのはこれまた当然だと氏が考えておられるのは明らかである。これらを「策略」と解釈するのは人情の機微にあまりに疎いものというほかない。

母と娘それぞれに「功利性」のあつたことは認められながらも、「奥さんが策略から娘を自分に近づけるのではないかという疑いを、疑いのまま自分の内に閉じ込め、現実の中では確かめようと」せず、「私」に「日々接しているお嬢さんの気持ちを見抜く力・姿勢が欠けていることの方に問題がある」と断言しておられるのであるから、これが「策略家説」を「かなりはつきりと打ち出している」ものとはいえないことは明白である。

○ IIの寺田論文では「お嬢さんの『笑い』」をどう解釈すればよいか論じられている。氏は「お嬢さんの笑い」は「嬌態と断定していいのではないか」とされた。しかし、それは「愛情からきた一種の『嬌態』」であつて、「笑い」も「何も特別な笑いであるわけではない」。「若い女に共通な」、「下らない事にも能く笑ひたがる」(二十六―「下」の―筆者注)笑いであり、「無論お嬢さんは、こうした『嬌態』を意識して演じているのではない。正に『無邪気に遣る』(三十四―「下」)のであり、彼女は『無意識な偽善家』なのである。」(傍点寺田氏)と論を展開し、「先生を惑わせ不安がらせたにもかかわらず、その罪深さや偽善性に気づかない「お嬢さん」と述べられた。気づかず無意識のうちになされる行為、「善とか悪とかの道德観念も無いで遣つてゐる」(「文学雑話」)「行為を「策略」とは言えまい。寺田氏の結論もまた「策略家説」とはみなし難く、むしろそれを否定しているものである。

○ IIIの秋山論文はI・IIとは違って、明らかに「策略家説」を説いている。「母子共に先生との結婚を望み、そのための綱を張り、あとは申し出を待つばかりの状態にあつたから」こそ「先生が結婚を申し入れた際奥さんが躊躇することなくこれを許諾し」たのであつて、母子「相互に暗黙の了解が成立したのである。」と述べておられるからである。「御嬢さん」の「笑ひ」についても、「『意識的な』『嬌態』であるのは勿論のこと、挑発の意味すら含んでいたことは明白である。」と、寺田

氏の結論と全く対立する見解を示しておられる。

しかし、秋山論文は後半になると、「静の過去は、『策略』と『技巧』に満ちていた。」としながらも、「御嬢さん時代の静の『技巧』はそれ自体罪とは言えず、『若い女に共通な』（下三十四）嬌態の一種に過ぎない。当然罪の意識も無かったであろう。」と論調が微妙に変化して寺田氏の論に近いものになってしまっており、論文内部に矛盾が見られる。この点でⅢも、無条件に「策略家説」をとるものとは言い難い面を持っている。

ただ、秋山論文で注意すべきは、「結婚後の静は聡明かつ貞淑な、静謐な魅力を湛えた女性に造型されている。したがって、同一の女性を描きながら御嬢さん時代の静との間にはイメージの分裂があると言わざるを得ない」との指摘のあることである。「策略家説」をとる論文の多くが「御嬢さん」時代の静についてのみ言及し、結婚後の静に関してはほとんど等閑視していることを考える時、これは重要な問題提起であったといえよう。この点については後で述べる。

○ IVの米田論文は、確かに「策略家説」を「かなりはつきりと打ち出しているもの」である。しかも、米田氏は秋山氏が「分裂」と表現された問題を「分裂」とはとらえず、「御嬢さん」時代も結婚後も一貫して静を「策略家」としておられるところに注目される。

すなわち、「三角関係あってこそはじめて恋愛らしい恋愛は成立つので、その中心に立つお嬢さんが、自分をめぐる男たちの暗黙の葛藤を知らない筈はない。じじつ知ってそれを楽しむところの笑いをしきりに笑っている

のだから」という記述や、「女らしい女に特有の自己本位とコケットリーの持主であることは、彼女が妻になつてからも変わらぬので」などの部分でそれは明らかであろう。

さらには、「事実からいっても、母親の注意を押しきってKに好意を寄せ、そのことで先生に嫉妬させ、Kに恋情を告白させるだけのことをした人間なのである。そのすべてが先生の疑心暗鬼、Kの思いすごしだとしても、あるいはお嬢さんの無邪気な（無意識の偽善）のせいだとしても、そういう女こそじじつは三角関係を意識して利用する者であること、『三四郎』の美禰子を見ても明らかだろう。」と論を進めておられる点からも、米田氏の立場は明確であることがうかがえる。

○ Vの相原論文は、石原氏が「お嬢さんの技巧に注目している」と紹介されたものである。「意識的なお嬢さんの嬌態」、「静は女性特有の欺瞞性を免れていない」といった表現が見られるところに注目された結果と思われるが、ほかに積極的に「策略家説」を述べた記述はない。石原氏も他と一線を画された所以であろう。

○ 以上、各論文を再読してきて明かなのは、石原氏が例にあげられた五つのうち二つ（ⅠとⅡ）は氏の論旨とは全く相容れない結論を有するものであり、一つは（Ⅲ）自身の内部に矛盾を抱えており、一つはわずかに触れられた程度にすぎず（Ⅴ）、従って「策略家説」を「かなりはつきりと打ち出している」といえるのはⅣの米田論文のみ、ということである。

もつとも、米田論文とても、「『こゝろ』を読む度に、これはとんでもない駄作、愚作、少なくとも失敗作ではなからうか、という素朴な思いを禁じ得ない」氏が、「バカバカしい所が多すぎる」とその「失敗作」ぶりを次々と展開していくところに主眼があつて、正面から静を論じたものではない点に注意しておく必要があるだろう。逆に、論文の主題を静に置いてゐるⅠ・Ⅱの両方が「策略家説」を否定してゐるのは興味深い。

いずれにしても、一九八五年の時点でこれら五論文を根拠に「策略家説」が「ようやく定説になりつつある」とはどう考えてもかなり無理のある立論であつたように思われる。

○  
では、その後今日までの研究ではどうか。初めに述べたように、石原氏の論文以後も賛否両論が出されており、「策略家説」はいまだ「定説」にはなり得ていない。

問題なのは、秋山氏言われるところの「分裂」である。「御嬢さん」時代の静を「策略家」とすれば、結婚後のいかにも良い妻である静との間に開きがありすぎるのである。この点については水川隆夫氏も、「奥さんとお嬢さんが藤尾親子のように『打ち合せ』をする情景を想像するならば、奥さんの品位ある人間像や結婚後のお嬢さん（静）の『誠実なる先生の批評家及び同情家』（上十八）としての人間像―無意識の『遊戯』（上二十）や問題回避（上十四）をすることはあつても―と分裂や矛盾が生じるであろう。」と述べておられる（注七）。「策略家説」を説く論文のほとんどは「下 先生と遺書」の、それも「五十一」までをもとにしており、「下」

の残りの部分や「上」「中」に見られる静に言及するところがまずない。「下」では「先生」の、「上・中」では「私」の視点から描かれているために静の人物像がとらえにくくなつてゐるのは否めない。が、もし結婚前の静が「策略家」であるのなら、たとえば、結婚後「先生」が「酒に魂を浸して、己れを忘れようと試みた時期」母親に「氣拙い事」を言われても夫にはそれを「隠してゐる静（下 五十三）、あるいは、夫の数少ない親しい人のようだというだけで、しばしば押しかけてやってくる「私」をもてなしたり、はては、「私」の「衣服の洗ひ張や仕立方」まで「面倒臭いといふ顔を」せずに引き受ける静（上 二十）とでは、やはり同一人物とは思えないような違いがあると言わざるをえない。これらをどのように考えたら良いのか、是非納得の行く説明が欲しいところである。

先に述べた秋山氏は、「分裂」を「先生」の「贖罪意識」が結婚後の静像に影響したためにもたらされたものと、一応の解答を出された（注八）。すなわち、「結婚後の静は、咎を自覚する先生によって専ら贖罪の目で見守られ扱われ描写される。いわば静は贖罪の対象と化している。聡明かつ貞淑で、『門』の御米にも似た静謐な魅力を湛えた女性とのみ印象されるのはその故である。」と。だが、この解答にはうなずけない。なぜなら、これでは「下」の終わり近くに現われる静についてしか説明したことにならないからである。言うまでもなく「上・中」は「私」の視点から描かれていて、「先生」の「贖罪意識」などがそこに入り込む余地は無いにもかかわらず、「聡明かつ貞淑・・・」な静を読者がイメージする

のは主として「上」の記述によっている以上、秋山氏の解釈では不充分と言わざるをえないだろう。

では、米田氏のように「分裂」を認めず、静を一貫して「策略家」ととらえたらどうであろうか。

このような見方を代表するものとして、阪口曜子氏の論文があげられるだろう(注九)。阪口氏は徹底して「策略家説」を展開しておられる。結婚前の静については今省略するが、たとえばしばしば問題にされる「上 十五―二十」の、「私」が「奥さん(静)」と留守番をする場面について、「あろうことか二人の男の人生を奪った過去の自分の他ならぬ犯罪を餌にして今また第三の無垢なる男を釣ろうとする静子のこの行為の無邪気さは、先生や作者の依って立つすっきりした倫理の背骨のある人間存在から限りなく遠い、異類としか言いようのない女性存在のグロテスクな場所を思わせ暗澹たる気持ち拭えない。」とあるし、「先生がもし自殺しなかったら、この女は今度はKの代りに『私』を引き込んで過去の二の舞を演じてしまっていたかもしれないのである。」とも述べておられる。

さらにこれを引き継いだところに井原三男氏の論があつて、先の留守番の場面の最後のあたりに「下女丈は仮寝でもしてゐたと見えて、ついに出て来なかつた。」(上 二十)とあるのを、「おそらく先生の妻静子は下女に敵命するか、眠り薬でも飲ませて『ことりとも音をさせない』ようにしたのでだろう。」と解釈された(注一〇)。

結婚前も結婚後も静が「策略家」であるとすると、以上のような解釈が出てくるのは論理的にも当然の帰結

であろう。「分裂」なく静をとらえるためにはこのようにでも考えるほかないからである。

だが、首尾一貫して静を「策略家」と見ようとする時、一つ大きな問題がある。結婚後の静の行動のすべてが「策略家説」で無理なく解釈できるかどうか、である。

「策略家説」に立つ論者たちがほとんど決まったように取り上げるのは、(上 八)の「『子供は何時迄経つたつて出来つこないよ』・・・『天罰だからさ』」というところと、(上 十四)の「すると襖の陰で『あなた、あなた』といふ奥さんの声が二度聞こえた。」と、先程の留守番の場面の三ヶ所であつて、まるでほかに静の姿はないかのである。しかし言うまでもなく、読者にはもつといろいろな静が示されている。

「妻は度々何処が気に入らないのか遠慮なく云つて呉れと頼みました。それから私の未来のために酒を止めろと忠告しました。・・・」(下 五十三)や、「妻はある時、男の心と女の心とは何うしてもびたりと一つになれないものだらうかと云いました。」(下 五十四)など。あるいは、「上 三十二―三十五」の「私」の卒業記念の晩餐の場面で、「些とも意地の悪いアイロニーを認めなかつた」が「同時に目出たといふ真情も汲み取る事が出来なかつた」「先生」の「御目出たう」に対して、「奥さんは私に『結構ね。無御父さんや御母さんは御喜びでせう』と云つて呉れた。」と描かれた静(上 三十二)、「時候が時候なので・・・食欲が進まない」「私」に「『是は宅で拵へたのよ』」とアイスクリームをご馳走する静(上 三十三)。これら実に良い奥さん

ぶりを示しているかに思える静が「策略家説」でどのよう  
に解釈できるのか、それが明らかにされない限り「策  
略家説」は成り立たないのではないだろうか。

○ 結婚前の静と結婚後の静とを「分裂」なくつなげて、  
妻となつて後の静の姿・行動のすべてについて無理なく  
解釈され得たときに初めて、「策略家説」は「定説」に  
なるだろう。これまでの論文にいま一つ説得力が欠けて  
いたのは、その仕事が充分なされていなかったからに他  
ならない。

従つて、「分裂」をもたらした原因であるところの「  
御嬢さん策略家説」そのものを疑つてみて、それを否定  
することで自動的に「分裂」をいわば消滅させようとす  
る試みが絶えないのも、故ないことではないのである。  
実際、田中美氏（注一一）、小林和子氏（注一二）、水  
川隆夫氏（注一三）その他に「策略家説」に対する反論  
はいくつもあるが、同様のものはこれからも書き続けら  
れるに違いない。そしてその際いつも立ち返るべきは、  
先にかなり詳しく見たIの松本氏の論文であるだろう。  
将来のいつか、「策略家説」が「定説」になり得るか  
どうか、私見ではその可能性はあまり高くないように思  
われる。

注

一 「『こゝろ』のオイディプスー反転する語り  
」 成城国文学 第一号（一九八五・三）

のち、玉井敬之・藤井淑禎編『漱石作品論集成  
第十巻 こゝろ』桜楓社（一九九一・四）に所  
収。

二 「『こゝろ』の奥さんと御嬢さん」 近代文  
学試論 第一七号（一九七八・一一）

三 「お嬢さんの『笑い』—漱石『こゝろ』の一  
視点—」 日本文学（一九八〇・七）

四 「『こゝろ』の死と倫理—我執との相関—」  
国語と国文学（一九八二・二）のち、『

漱石文学論考—後期作品の方法と構造—』桜楓  
社（一九八七・一一）に所収。

五 「『こゝろ』を読む」 日本文学（一九八  
四・一〇）のち、『わたしの漱石』勁草書房

（一九九〇・八）に「挑戦としての失敗作—  
こゝろ—」として所収。

六 「『こゝろ』の人物像—『明治の精神』と『  
現代』との関連において—」 日本文学（一  
九七二・五）のち、『漱石文学』塙書房（一  
九八〇・七）の「第一章」。

七 『漱石『こゝろ』の謎』 彩流社（一九八  
九・一〇）

八 注四に同じ。

九 「愛の殉教者—『心』論—」 『魔術として  
の文学 夏目漱石論』沖積社（一九八七・一〇）  
所収。

一〇 『漱石の謎をとく・「こゝろ」論』 勁草出  
版サーピスセンター（一九八九・一二）

一一 「『こゝろ』という掛け橋」 日本文学（

一九八六・一二)

一二 「漱石『こゝろ』について―女性像を視点にして―」 茨城女子短大紀要 第一五号 (一九八八・六)

一三 注七に同じ。

付記

筆者引用の『こゝろ』の本文は、集英社版『漱石文学全集 第六巻』によった。が、ワープロ原稿の都合で漢字は新字体にし、ルビは省略したことをお断わりしておく。

全くの門外漢が近代文学などに手を出してしまい、内心いささか忸怩たる思いがある。教材にするつもりで参考文献を読み始めたらそのまま深みにはまってしまう、というのが正直なところで、見当違いの部分もあることと思う。大方のご教示をいただけるならば幸いである。